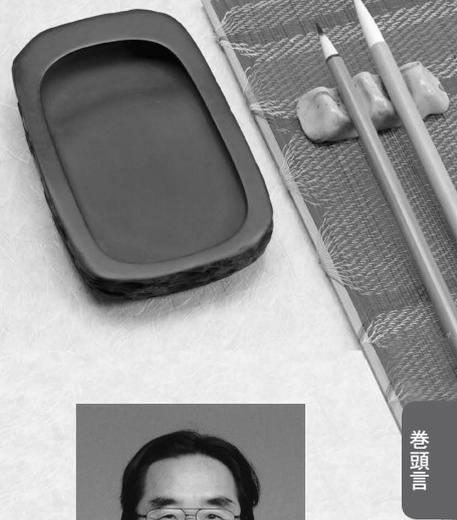


# 化学教育 徒然草



## — 化学と教育 50年 —

TSUMAKI Takao

妻木 貴雄

筑波大学附属高等学校 教諭  
日本化学会フェロー



巻頭言

はじめて化学の授業を受けたのは、約50年前の高校2年生のとき。担当の先生が「教科書は読まなくてよいから図書館にあるケムスを読め」と言っていたのを思い出す。海外の新しい科学教育の波が日本に押し寄せてきたときでもあった。数年後には化学を教わる立場から教える立場になるのだが、当時の化学教育は今より活気にあふれていた気がする。

昨年、高校の新学習指導要領が告示された。そこには科学的に探究するために必要な資質・能力の育成がうたわれている。約50年前の学習指導要領でも探究学習はキーワードだった。今回はうまく定着するのだろうか。実験重視も学習指導要領ではことあるごとに強調されている。結構なことだが、これもなかなか定着しない。新学習指導要領で具体的な実験が例示されたのも、この程度の実験くらいはやって欲しいという思いなのかもしれない。

一方で教育現場は以前に比べて忙しくなった。文部科学省によると、1966年に行われた教員勤務実態調査では、平均残業時間が月8時間だった。50年後の2016年度の調査では、小中学校とも1日当たりの学内勤務時間は11時間を越えている。残業が月80時間以上の教員も多いらしい。これは高校でもあまり変わらないのではないか。こういう状況では、実験やそのための教材研究にはなかなか時間が取れない。ちなみに、教職調整額がある関係で教員には残業代は出していない。

OECDが2013年に実施した国際教員指導環境調査(TALIS)を見ると、教師(このときの調査対象は中学校教師)の勤務時間は日本が参加国中最長で、「教職は社会的に高く評価されていると思う」という回答は28.1%(参加国平均30.9%)だが、「全体としてみれば、この仕事に満足している」という回答は85.1%(参加国平均91.2%)だった。この数字をどう見るかは難しいところだが、日本の(あるいは参加国の)多くの教師は教育にやりがいを感じているように思える。だからこそ、仕事量が増え、長時間勤務につながるのだろう。

熱心な先生方が、仕事を精選し、優先順位を決め、実のある化学教育に邁進してもらうことを祈って、筆を置くことにする。

[連絡先]

112-0012 東京都文京区大塚1-9-1 (勤務先)